

(口絵解説)

花の病害虫(14)——シュッコンカスミソウ——

シュッコンカスミソウの生産状況

シュッコンカスミソウの1991年産の作付面積は590 haでキク、リンドウ、カーネーションに次いで、4番目に多く栽培されている品目である。生産額は111.5億円で、キク、カーネーション、バラ、ユリ類に次いで5番目に多く、切り花の中では主要な品目となっている。

主な栽培地は夏秋切り栽培では、北海道、長野県、福島県等であり、冬春切り栽培では熊本県、和歌山県等である。夏秋切り栽培は温暖な地域では奇形花が発生するため不可能であり、作型が地域によりはっきりと区別されている。

シュッコンカスミソウは節間がつまり、硬いということが品質の中で最も重要視されるが、そのために最近では隔離床を利用した栽培も行われている。

現在最も多く栽培されている品種はプリストルフェアリーであるが、最近、硬くてしまった品質を備えたダイアモンド、ニューフェイス、ゴラン等の品種が導入されつつある。しかし、これらの品種は作りにくいことや、市場での評価の違いもあり、急激な広がりは見られていない。

シュッコンカスミソウに発生する病害虫と

その防除

発生する病害は、根頭がんしゅ病、こぶ病、萎ちょう細菌病、斑点細菌病、疫病、茎腐病、黒斑病、苗腐病の8種類である。また、最近、*Fusarium moniliforme* による立枯病の報告もある。

根頭がんしゅ病の症状は挿し芽床では、切断面にゴールが形成され、発根量は減少し根の生育が阻害される。生育中の株では直根の部分に形成されやすく、支根の発生が減少し、生育遅延となったり、生育不良となる。土壌伝染するので、土壌消毒が必要である。

こぶ病は挿し芽時に発生する。切断面が異常に肥大し、癌腫状となり、挿し穂の活着が悪い。

萎ちょう細菌病は、株に萎ちょうがみられ、導管部に

褐変がみられる。親株でこのような症状を示す株からは挿し穂は採穂しないことが重要である。

斑点細菌病は葉に水浸状の斑点が生じ、やがて褐色の斑点となる。この斑点は融合して大型の斑点となり、斑点部分で葉がよじれたり、いびつになる。本病は高温時に雨があたると露地栽培で発生しやすい。また、ハウスでも台風でビニールを除去し、雨に当たると発生がみられる。防除薬剤は銅剤やマイシン剤が有効であるが、それ以上に雨にあてないようにすることが重要である。

疫病は株が萎ちょうし、やがて枯死する。萎ちょう株の地際の根が黄褐色に軟化腐敗する。夏から秋にかけて発生がみられる。土壌伝染をするので土壌消毒が必要である。生育中にはメタラキシル剤の効果が高い。

茎腐病も疫病同様、株が萎ちょうし、やがて枯死する。萎ちょう株の地際の茎及び根が濃茶褐色に腐敗する。疫病同様土壌消毒が必要であるが、生育中にはメプロニル水和剤、ペンシクロン水和剤、フルトラニル水和剤、トルクロホスメチル水和剤が有効である。

黒斑病は葉、茎、花梗部に円形ないしは楕円形の斑点が生じる。TPN 水和剤、マンネブ水和剤等の散布が有効である。

苗腐病は初め育苗中の苗がスポット状に腐敗し、やがて周囲へと拡大していく。夏季高温時に発生しやすく、進展が速い。薬剤としては、マンゼブ・メタラキシル水和剤が有効である。

シュッコンカスミソウに寄生する害虫は、アブラムシ類、ヨトウムシ類、ハダニ類、ハモグリバエ類等がある。発生は春先から秋口まで多くみられ、特にヨトウムシ類による被害が大きい。防除薬剤としては、有機リン剤、合成ピレスロイド剤、IGR 剤等を輪番使用し、抵抗性を獲得させないように注意する必要がある。また薬害の発生には注意する必要がある。殺虫剤で薬害の発生が確認されているものは、アセフェート粒剤、アセフェート水和剤、エチルチオメトン粒剤、メソミル水和剤、チオジカルブ水和剤があり、これらの薬剤は使用しない。

今後、新しい薬剤の登場とともに、薬害の発生の有無については、慎重に検討していく必要がある。

(大分県高田農業改良普及所 吉松英明)